

# 鄭樵『圖譜略』の著述意圖について

原田 信

はじめに

鄭樵（一一〇四～一一六二）字は漁仲、北宋末から南宋にかけての人である。若年より郷里の莆田にある夾漈山に草堂を結び、讀書や講學、著述に専心すること三十年、八十種あまりの書物を著し、自著の献上や推薦によって禮兵部架閣という宮中の書庫管理官を授けられた。のちに三皇五帝の傳説の時代から隋代までの通史である『通志』二百卷を完成させて書籍の編纂を行う樞密院編脩官に任ぜられたが、『通志』の献上を目前にして卒した<sup>(1)</sup>。

『通志』には禮樂、職官などの典章制度や、六書、藝文といった學術分野の來歴、そして鄭樵自らの見解を記した「二十略」五十一卷があり、『圖譜略』はこのなかの一巻である<sup>(2)</sup>。『圖譜略』の内容は「索象」、「原學」、「明用」、「記有」、「記無」の五項目に分かれており、「索象」は圖譜の歴史、「原學」は學術と圖譜の關係、「明用」は圖

譜が不可欠な學術分野と、これらの分野を學ぶ必要性を説き、「記有」と「記無」では當時の圖譜の佚存を記している。

『圖譜略』は、鄭樵が「臣の胸臆より出で、漢唐諸儒の議論に涉らざるなり」（『通志』總序）というように、圖譜を體系的に論じた初めての著述である。このため、清の章學誠『校讎通義』は鄭樵が目錄の著録分野に圖譜を加えたことを特に記し<sup>(3)</sup>、近代では梁啓超『中國歷史研究法』が歴史批評を行った人物として唐の劉知幾、清の章學誠とともに鄭樵を挙げ、『圖譜略』をその特徴的な學説の一つとしているなど<sup>(4)</sup>、『圖譜略』は鄭樵の卓見として目錄學や歷史學の觀點から評價されていた。鄭樵の獨創として後世注目された『圖譜略』は、中國の學術における圖譜利用の發端を知る上で重要な言説の一つである。

ところが、鄭樵に關するこれまでの研究では、『圖譜略』の内容に言及しても、どのような意圖から著されたのか、これまで検討されることはなかった<sup>(5)</sup>。それでは、鄭樵が『圖譜略』を著した意圖と

は何だったのか。

『圖譜略』の内容は全體を通じて圖譜を用いることの必要性を主張しているが、少なくとも単に圖譜利用の推進だけを意圖して著されたのではない。なぜならば、圖譜は『圖譜略』が著されるよりも、はるかに古くから利用されてきたためである。例えば、書名に「圖」とあり圖解と推測される書物は、『漢書』藝文志に二十種、『隋書』經籍志に百九十九種、『宋史』藝文志に四百二種が見える。また、王應麟の『玉海』には、北宋初期から南宋の紹興年間までに限っても、天文、宮殿、祭器、百官、五經など五十ほどの圖解が作成され、参照された経過が記されている。<sup>6)</sup>つまり、鄭樵は従来知られていた圖譜とは異なつた、何かほかの理由によつて圖譜に着目し取り上げたと考えられる。そこで、本稿は『圖譜略』の論點と、鄭樵の思想を手がかりとして、その著述意圖を検討する。

### 一、歴代目錄の圖譜著録に對する問題意識

『通志』の「二十略」は、鄭樵が「百代の憲章、學者の能事、此に盡けり」(『通志』總序)というように、古今の典章制度と學術の歴史を総合的に論述する目的から記された。この目的は『圖譜略』についても同様であり、鄭樵は『圖譜略』のはじめに「索象」の項目を設け、圖譜の歴史を記している。この歴史からは、鄭樵が圖譜を通じて抱いた問題意識が見てとれる。

「索象」は、圖譜の歴史を天地の「象(すがた)」を表す河圖と、「理」を表す洛書の出現から説き起こし、「圖」と「書(文字)」は相互に補いあうものだから、ともに用いるべきだと述べる。そして、秦は焚書により儒學の書を焼き捨てたが、儒學以外の「圖」や「書」は排斥しなかつたので、秦の滅亡後、蕭何や韓信、張蒼、叔孫通といった漢初の功臣がそれぞれ律令、軍法、曆や度量衡、儀禮制度を定めることができたという。また、秦から漢の初めまでに個人の藏書を禁止した「挾書律」が施行されていたにもかかわらず民間に儒學が傳わたつたのは、圖譜が利用されていたからだと推測している。秦の滅亡から漢の建國という混亂のなかで諸制度が整備され、學術が斷えることがなかつたのは、圖譜を重んじ、これを利用する氣風があつたからだと鄭樵は考えた。

「索象」には、續けて圖譜利用の衰退が記されており、鄭樵の抱いた問題意識が示されている。鄭樵は、前漢以降「圖」よりも「書」のほうが増えるに従つて、儒者は議論ばかりに注力して互いに争う風潮が蔓延し、その結果、學術成果はほとんど得られなくなつたと考えた。<sup>7)</sup>これは恐らく、『漢書』藝文志に見えるように、漢代の學者の間に存在した「經文の五文字を解釋するの」に二、三萬言を費やした」という風潮を踏まえたものだろう。<sup>8)</sup>既述したように「索象」の冒頭に圖は「象」、書は「理」を表すとある。書の表す「理」とは曖昧な言葉だが、理屈、理論、法則、道理、すじみちなどと解されるように、いずれにしても形而上の存在であり、個々の認識の仕

方によって捉え方が異なるのは當然だろう。これに對して、圖は「象」、すなわち事物の様子や法則を視覺的に描いたものだから、認識の齟齬は生じづらい。鄭樵は、不要な議論が行われた漢代の風潮を「理」への偏重だったと考え、この原因として、圖譜が用いられなくなったことを推測したのである。

そして、鄭樵は圖譜が用いられなくなった原因を前漢の劉向、劉歆父子と斷じ、「歆向の罪、上は天に通ず」と厳しく批判した。その理由は、劉向、劉歆が編纂した目録にあるという。『圖譜略』の「索象」では、初めて諸書を著録した綜合目録である劉歆の『七略』や、これをもとに編纂された班固の『漢書』藝文志が「書」のみを収録し「圖」を収録しなかったこと、そして、後世の目録がこの二つの目録の方法を踏襲した結果、圖譜は目録に収録されず廢れたと述べている。<sup>9)</sup> 鄭樵はさらに『七略』や『漢書』藝文志の方法が、後の『隋書』經籍志にも引き繼がれたことを擧げて、『漢書』藝文志の後に編纂された統一國家の綜合目録『隋書』經籍志が圖譜を収録しなかったことで虞夏から漢代に至るまでの圖譜が全く傳わらなかったと、その影響の大きさを指摘している。<sup>10)</sup>

このように、圖譜の衰退と目録への収録を結びつける鄭樵の論は、一見すると不可解である。なぜかといえば、本論の冒頭で述べたように、書名に「圖」とある書物だけでも『漢書』藝文志に二十種、『隋書』經籍志に百九十九種が見えており、どちらの目録も圖譜を収録していたからである。だが、『圖譜略』の記述をさらに見ると、鄭

樵の批判は、目録における圖譜収録の有無ではなく、目録が圖譜を一つの項目として収録しないことに向けられていたらしい。

目録と圖譜衰退の因果關係について、鄭樵は「索象」のなかで「且つ専門の書有らば、則ち専門の學有り。専門の學有らば、則ち其の學必ず傳わりて書も亦た失われず（且有専門之書則有専門之學、有専門之學則其學必傳而書亦不失）」と説明している。圖譜と、文字によって記された書物とは性質や用途が異なるから、「専門之學」、これは『圖譜略』の「原學」では「圖譜之學」と呼ばれているのだが、すなわち圖譜は「圖譜之學」という獨立した學問として目録に収録されるべきであり、そうすれば圖譜が失われることはなかった、というのが鄭樵の考えであった。鄭樵の批判は『漢書』藝文志や『隋書』經籍志が圖譜を収録したか否かではなく、圖譜を一つの學問と見なさず、他の分野に分けて収録したことに向けられていた。

以上のように、鄭樵が圖譜の歴史を通じて抱いた問題意識とは、漢代以降の圖譜利用の衰退とこれが招いた「理」への偏重という學風の變化であり、その背景に存在した目録の分類方法であった。この問題意識からすれば、鄭樵が『圖譜略』を著した意圖の一つは、圖譜の存在や傳來を記すだけではなく、歴史書である『通志』のなかに『圖譜略』という項目を立てることによって「圖譜之學」の存在を明らかにすることにあった。

ただし、目録の観点から見えてくる著述意圖は、おそらく鄭樵の獨創ではない。鄭樵より前にも圖譜の収録を明示し、あるいは獨立

した項目として収録した目録が存在しており、鄭樵は『七略』のもととなった劉向の『別錄』中、任宏が編纂を擔當した兵書目録のみが圖と書の卷數を記していることや、南朝の王儉が『七略』に倣って編纂した『七志』に「圖譜志」の項目が立てられていたこと<sup>(11)</sup>に言及している。特に『七志』については「末學にして此の作有るを意わざるなり」といい、大部分の目録が劉向、劉歆の『七略』の方法に準じたなかで、『七志』が圖譜を専門の項目に収録した意外性を述べている。この二つの目録の存在は、鄭樵が圖譜と目録の關係性に着目するきっかけの一つであったと考えられる。

## 二、「圖譜之學」を明らかにする目的

鄭樵が『圖譜略』を著した意圖の一つは、「圖譜之學」の存在を明らかにすることであった。それでは、鄭樵は「圖譜之學」を通じて何を行おうとしたのだろうか。

前節にて述べたように、鄭樵は圖譜利用の例として、秦の滅亡から前漢の建國までの混乱した社会狀況のなかで、圖譜が用いられたことで諸制度が制定されたり、儒學が傳わったりしたことを挙げた。これらは圖譜の歴史から見た圖譜の意義だが、ほかにも、『圖譜略』の「索象」では學術における圖譜の意義を述べている。ここでは、古の學者を例として、視覚的な情報を伝える「圖」と、論理的な情報を伝える「書」の兩者の性質を理解し、ともに用いることで古の

學者は容易に學問を脩得し、成就させたといひ、これに對して後世の學者は「書」ばかりを學び、言辭に偏重した議論に努めた結果、どれだけ學んでも成果を上げることや行動に應用することができず、實際に何かを行おうにも、どうしてよいかわからない、と批判している。<sup>(12)</sup>鄭樵は圖譜の利用を、學者が自らの學問を成就させ、その成果を實際に役立てることができるか否かの要諦と考えたのである。『圖譜略』の「原學」には、圖譜を用いることの意義と、用いられないことの弊害がより詳しく述べられている。

鄭樵は學問の盛衰について、その境目を夏、殷、周の三代までとし、漢、魏晉と時代が下るに従って衰退したと考えた。<sup>(14)</sup>そして、三代より後の學問が衰えた原因は「義理之學」と「辭章之學」という言辭を主體とした二つの學問への偏重だとしている。鄭樵の見解によれば、「辭章之學」は言辭を飾り耳目を樂しませるだけの表層的な學問、「義理之學」は内容が深遠であつても他者への攻撃にばかり意を用い現實に則さない學問であり、<sup>(15)</sup>兩者は「二者は塗を殊とするも同に歸す、是れ皆な語言の末に従事して、實學を爲すに非ざるなり（二者殊塗而同歸、是皆從事於語言之末、而非爲實學也）」というように、どちらも言辭を操るだけの學問であり、「實學」ではなかった。そして「圖譜之學」が傳わらなかったために、「實學」は言葉だけのものとなり廢れてしまったと結論付けている。<sup>(16)</sup>つまり、鄭樵は『圖譜略』によって「圖譜之學」の存在を明らかにすることで、言辭が行き過ぎて空虚になった學問を「實學」へ改めようとし

たのである。

### 三、「實學」における圖譜の必要性

『圖譜略』の内容からすると、鄭樵のいう「實學」とは言辭の學問とともに、具體的な事物を學び、その成果を實踐することを指していたようである。ただし、鄭樵にとつての「實學」がより具體的によどのようなものなのか、そしてなぜ「實學」に圖譜が必要なのか、という點について『圖譜略』の記述はやや曖昧である。この點をもう少し明確にする上で、『二十略』中、『圖譜略』のほかに唯一「實學」の必要性を主張している『昆蟲草木略』の記述は一つの手がかりとなる。

『昆蟲草木略』は、「實學」が廢れた原因を「學者は窮理盡性の説を操り、虚無を以て宗と爲し、實學置かれて問われず（學者操窮理盡性之説、以虚無爲宗、實學置而不問）」と記し、『圖譜略』と同様に、學者が「性」や「理」ばかりを追い求め中身の無い説を振りかざした結果、「實學」は顧みられなくなったと批判する。そして、「實學」が顧みられない例として、經書を學ぶことはあつても田野の動植物を知らない儒生と、田野のことは知つてゐるが經書を知らない農夫という、兩者の知識が結びつかないために「鳥獸草木之學」が廢れたことを指摘している<sup>(17)</sup>。鄭樵の批判は學問を脩得すべき儒生に向けられたものであり、經書を學ぶ儒生が、書物の知識のみならず、

實際的な田野の知識を持つことこそが「鳥獸草木之學」における「實學」の一面であつた。

鄭樵はさらに「實學」の例として本草をとりあげ、「惟だ本草の一家は人命の繋かる所なれば、凡そ之を學ぶ者は務め眞を識るに在り、他書の只だ説を求むるに比せざるなり（惟本草一人人命所繋、凡學之者務在識眞、不比他書只求説也）」と述べている。本草は人命に關わる學問であるから、これを學ぶ者は他の分野の學問のように諸説を涉獵するだけでなく、より一層眞實を理解しようとするものだと指摘している。

續けて、『昆蟲草木略』には鄭樵自身が夾漈山において讀書と同時に田夫や老人と交流し、山中の自然を觀察することで實學を實踐しようとした狀況が記されている<sup>(18)</sup>。ただし、野に身を置いて著した『昆蟲草木略』でさえも鄭樵が考へる實學を體現できなかったように、最後に「今昆蟲草木略を作り、之が爲に會同し、庶幾わくは衰<sup>や</sup>晚少遺忘に備えん、豈に敢えて實學を論ずるや（今作昆蟲草木略、爲之會同、庶幾衰晚少備遺忘、豈敢論實學也）」と結び、『昆蟲草木略』は諸説を集めたに過ぎず、實學を論じているとはいえないとされている。

『昆蟲草木略』に見えるように、鄭樵にとつて「實學」の最も理想的なあり方は、何よりも實物の觀察を通じて得た實用的な知識や經驗によつて立論することであつた。しかし、一人の人間が、この世に存在するあらゆる事物を實際に觀察するのは不可能といつてよ



い。鄭樵は野にあったが、それでも『昆蟲草木略』を著すに際して諸説を集めるにとどまったのも、この點が實現し難かったからであらう。

ところが、理想的な方法ではなくとも、この問題を解決する手段があった。鄭樵にとつて、それが圖であった。紹興十一年（一一四一）頃に記された「寄方禮部書」には鄭樵が『爾雅』を補訂した経過が見え、このなかで鄭樵は圖の利用について言及している。<sup>(19)</sup>

鄭樵は經書に記された事柄のうち、「人情」や「事理」は自らの意に任せて推測できるので讀書を繰り返せば理解できるが、天文や地理、車輿、器服、草木、蟲魚、鳥獸については、讀書を繰り返しても知りようがないと述べている。<sup>(20)</sup>そこで、鄭樵は『爾雅』の補訂を試みたのだが、讀者が事物の様子をより詳しく理解できないことを恐れ、圖を付したといふ。<sup>(21)</sup>

先に述べた『昆蟲草木略』の論によるならば、實物を觀察しなければ本當の意味で名物を知ることにはならない。しかし、經書を學ぶ者すべてが實際に各地に赴いて天文や地理、動植物といった名物を觀察することは不可能であり、そもそも名物を正確に知ることは經書の内容を理解するため補助手段であつて、それ自體が經書を學ぶ目的ではない。そこで、鄭樵は觀察の代替手段として圖を利用したのである。

ただし、圖譜であれば何でもよい、というわけではなかつた。『通志』の『器服略』には、當時存在した禮圖が禮の諸説のみによつて

描かれたため、これをもとに製作された祭器の形状は、祭器の持つ意義を表してはいるが實用には適さないといふ批判が見える。<sup>(22)</sup>

鄭樵の禮圖批判が妥當かどうかはともかく、圖の根據に問題があれば、その内容が信頼性に缺けることは疑いない。この點において圖の利用は實物の觀察に比べれば次善の方法であろう。だが、少なくとも實際の事物に基づき、合理的で根據のある圖は、鄭樵の考える「實學」、つまり正確で實際的な知識を得て、これを實踐するために不可欠の存在であつた。

#### 四、「圖譜之學」と知的欲求

鄭樵のいう「圖譜之學」は、圖譜を通じて文字だけでは知り難い正確な知識を得ることであつた。それでは、そもそも鄭樵が「圖譜之學」に着目した理由とは何だつたのだろうか。

鄭樵は『圖譜略』の「原學」のなかで、「圖譜之學」の重要性に着目したきっかけとして漢代の宮室制度に詳しかつた晉の張華と、『春秋』に見える諸侯の系譜に詳しかつた唐の武平一を挙げている。當初、鄭樵は兩者が制度や系譜に詳しい理由がわからなかつたが、楊佺期の『洛京圖』や杜預の『公子譜』を見たことで、その知識が圖譜に由來することを發現し、それまで着目することのなかつた「圖譜之學」が學術上重要な分野であると考えに至つたといふ。<sup>(23)</sup>

鄭樵が「圖譜之學」に着目した契機は、張華や武平一の知識がどの

ように脩得されたのか、という疑問点であった。

鄭樵にとって、知識は分野ごとに區切られてはならず、あらゆる知識に通じることで初めて意義をもった。鄭樵はこれを「會通」と稱した。鄭樵は『通志』總序の冒頭において、斷代史を否定した『通志』の編纂構想として會通の重要性を説き、會通を實踐した孔子や司馬遷を目標にしていたと述べている。<sup>(24)</sup>

鄭樵自身、豊富な知識を具えた人物であつたらしく、紹興三十年（一一六〇）、道すがら晩年の鄭樵と出會つた陸游はその人物を「好古博識」と評している。<sup>(25)</sup> 實際、鄭樵は若年より様々な知識を脩得することに務めていた。紹興十八年（一一四八）、高宗に自らの經歷を述べた「獻皇帝書」の冒頭には、夾漈山に居を構えた時から、古今の書物を読んで百家の學に通じ、「六經」によつてその學識を補おうという信念を持っていた、とある。<sup>(26)</sup> 儒者といえはまず経書を重視するものだが、鄭樵にとつて重要なのは、諸學を涉獵して見聞を廣め、多様な知識を身につけることであり、「六經」を學ぶのも知識脩得の一環であつた。

さらに、鄭樵は書物から得られる知識だけでは不足を感じたよう<sup>(27)</sup>で、佚存に關わらずあらゆる書物や圖譜、彝器、碑銘を探し求め、書物の殘缺や圖譜、彝器、碑文にも世の道理を見出し、他書を考訂する意義があると考へた。<sup>(27)</sup> 天下の文獻や資料を訪ねてあらゆるものを知ろうとする信念は、紹興十七年に記した「上宰相書」にも簡略ながら記されており、鄭樵の強い自負が伺われる。<sup>(28)</sup>

鄭樵が博識を志して探し求めた資料のなかには、すでに圖譜が含まれていた。だが、この時點では圖譜を獨立した學問と見なしていたとは記されていない。

「獻皇帝書」には、鄭樵が古今の學問に通じようと考えてからこの上奏文を記すまで「忽忽として三十年」と述べている。この三十年間のどの時期に、「圖譜之學」に着目する契機となつた『洛京圖』や『公子譜』を見たのか明らかではない。ただし、先に引用した「寄方禮部書」には三十年間の學問の經過と、その時々著書を記しており、圖譜に着目した過程が伺われる。

三十年のうち、初めの十年は「經旨之學」を脩め、その後は順に「禮樂之學」を三年、「文字之學」を三年、「天文地理之學」と「蟲魚草木之學」を五、六年、「討論之學」「圖譜之學」「亡書之學」を八、九年脩めたといい、夾漈山に居て二十一、二年目にあたる「天文、地理之學」を脩めた頃に、初めて『百川源委圖』や『春秋列傳圖』という圖解を編纂したとある。

鄭樵が初めて圖譜を編纂した時期、あるいは「圖譜之學」を脩めた時期のいずれにしろ、鄭樵が學問を脩めた三十年間の後半に當たる。これは、鄭樵が廣範な知識を得ようとして、諸學を脩めていく過程で「圖譜之學」に思い至つたことを示している。この經過と、先述したように鄭樵の考へた圖譜の二つの性質が「至約」や「求易」であり、さらに張華や武平一のような知識の背景に圖譜の存在を推測したことからすれば、まず、鄭樵は多様な資料を探し求めるなか

で圖譜の役割に注目しはじめ、そして、様々な知識を得ようとする過程で、膨大な情報の理解を効率的に行い、さらには本論の第三節の終わりで述べたように、より正確な知識を得るために圖譜を利用したのである。こうして、鄭樵は自らの実践と経験を「圖譜之學」という獨立した學問分野へと昇華させたと考えられる。

### おわりに

鄭樵が『圖譜略』を著した意圖は、歴史上獨立した學問として扱われることがほとんどなかった「圖譜之學」の存在を明らかにし、正確で廣範な知識の脩得を目的とした「實學」を實踐することであった。

廣範な知識の脩得は、『圖譜略』を著した意圖であるのみならず、鄭樵が學問を脩める當初から志した出發點であった。しかし、書物から得られる知識はどれだけ多く學んだところで、それが正確なものだとは限らない。『圖譜略』の「原學」にある魏晉以降の學術が衰えたという見解（魏晉以降、日に以て陵夷す）や、「寄方禮部書」に見える、爾雅の學を正確に理解すれば經書の注疏は無用のものとなるという見解（爾雅の學既に了然たらば、則ち六經の注疏は皆長物なり）は、天下にある八割の書物を讀んだとまで言われる鄭樵が様々な學問分野を涉獵した結果、それまでの學術に對して抱いた疑念を端的に示している。<sup>(29)</sup> 鄭樵はこの疑念を拂拭し、事物の正確

な理解を探求しようと「實學」に思い至る過程で、次第に圖譜の意義を見出し、「圖譜之學」という學問分野として扱うべきだと考えるようになった。『圖譜略』によって示された「圖譜之學」は、鄭樵の旺盛な知的欲求と、その結果として抱いた學術への疑念を成立の背景としていた。

ところで、鄭樵の「實學」については、さらに考えるべき點がある。本論の第一節において述べたように、鄭樵の「實學」は、「義理之學」や「辭章之學」という言辭偏重の學問に對する批判から行われた。この批判は、魏晉以降の學術の衰退に對してのみならず、鄭樵の生きた時代にも向けられていたのだろう。

鄭樵が批判する問題點、例えば言辭については北宋の畢仲游（一〇四七～一一二一）が科舉に關して「嘉祐自り以來、天下の士常に科舉の累を患い、而して尤も詩賦を以て無用と爲す。故に廢して偶儷破碎の辭を去らしめ、而して進めるに通經義理の學を以てし、有用たらんことを庶幾う。而して十數年の間、綴文の士、號して經に通ずると爲す者、偶儷破碎たること反て詩賦よりも甚だし」と述べている。<sup>(30)</sup> このように、文飾に偏重する浮薄な學風は度々蔓延して

た。「實學」についても、鄭樵以前の人々が、各々の見解を示している。一例として、義理の學を主張して宋代以後の思想に影響を與えた程頤（一〇三三～一〇七七）は「經を治めるは實學なり。…中庸一卷の書の如きは、自ら理に至り。便ち之を事に推せり。國家に九



經、及び歷代聖人の迹有るが如く、實學に非ざるは莫きなり」といい、經書を學ぶこと、そして經書に記された「理」を行動に應用することこそが實學だと述べている。<sup>(31)</sup>「實學」とは實用的、實際的な學問という抽象的な言葉であるから多義的であることは免れないが、實踐すべき内容を經書の「理」とするか、廣範な知識とするかという點で、程頤と鄭樵の兩者が考える實學は随分と異なる。この違いは南宋の時に指摘されており、理學家の王柏（一一九七—一二七四）は、諸分野に渡る内容を網羅した『圖譜略』を評價しながらも「理に於いては其の尚ぶ所に非ず、此れ恨と爲すべきのみ」といい、鄭樵の論が「理」を重視していないと惜しんでいる。<sup>(32)</sup>理學の觀點からすれば、『圖譜略』の内容は知識に偏重していたのである。

しかし、『圖譜略』の論が示しているように、鄭樵にとって「理」だけでは學問が空虚に陥りやすく、この缺陷を克服する知識こそが實際的な學問を成就させる要素であった。鄭樵が圖譜の重要性を發現したきっかけとして博物や博學によって知られた西晉の張華や唐の武平一を挙げていることから明らかだが、「理」よりも知識によって知られた人物や學風は古くから存在しており、鄭樵だけが特殊な思想の持ち主だったわけではない。

理學が盛んになる宋代にあって、なぜ鄭樵のように知識を重んじ博物學的な學問を成す人物が現れたのか。『圖譜略』によって「圖譜之學」が示された原因をさらに詳しく検討するには、鄭樵の特徴的な學風とこれ以前に存在した他の學說との關聯性、そして鄭樵の

ように知識を重んずる人物が生み出された社會的背景について考察する必要がある。

#### 注

(1) 鄭樵の經歷については『宋史』卷四三六・儒林の鄭樵傳による。鄭樵の著書の數について『四庫全書總目』の「夾漈遺稿提要」は「獻皇帝書」の記載に基づき「已成者凡四十一種、未成者八種」とするが、吳懷祺「鄭樵著述考」（『鄭樵文集』、書目文獻出版社、一九九二年に所収）によると重複すると思われる書を除いても八十種あまりが確認される。鄭樵の著作の多くは散佚しており、さらに記載によって書名が異なるため、ここでは概數を示した。

(2) 本論では王樹民點校『通志二十略』（中華書局、一九九五年）を用いた。

(3) 『校讎通義』（上海書店出版社、一九八八年）卷一「互著」には「著錄之創、爲金石圖譜二略、與藝文并列而爲三、自鄭樵始」とある。

(4) 『中國歷史研究法』（台灣中華書局、一九五九年）には「批評史書者、質言之、則所評即爲歷史研究法之一部份。而史學所賴以建設也。自有史學以來、二千年間、得三人焉。在唐則劉知幾、其學說在史通。在宋則鄭樵、其學說在通志總序及藝文略校讎略圖譜略。在清則章學誠、其學說在文史通義」とある。

(5) 鄭樵の生涯や學術に關する早期の論述としては顧頤剛「鄭樵傳」（『通志二十略』所収、原文は『北京大學國學季刊』第一卷第二號、一九二三年に所収）があり、その後も總論としては徐有福「鄭樵評傳」（南京大學出版社、一九九八年）、吳懷祺「鄭樵研究」（廈門大學出版社、二〇一〇年）があるが、『圖譜略』の著述意圖について言及したものはない。これは、個々の論文についても同様である。また、鄭樵の研究書ではないが、張富祥「宋代文獻學研究」（上海古籍出版社、二〇〇六年）の「圖譜學」には、『圖譜略』について詳しい紹介がある。

- (6) 「玉海」(江蘇古籍出版社、一九八七年)卷五六・藝文の「圖」條による。
- (7) 「素象」の原文には「後世書籍既多、儒生接武、及乎議一典禮、有如聚訟、玩歲愒日、紛紛紜紜、縱有所獲、披一斛而得一粒、所得不償勞矣。何爲其然哉」とある。
- (8) 「漢書」藝文志には「古之學者耕且養、三年而通一藝、存其大體、玩經文而已。是故、用日少而畜德多、三十而五經立也。後世經傳既已乖離、博學者又不多聞闕疑之義、而務碎義逃難、便辭巧說、破壞形體、說五字之文、至於三萬言。後進彌以馳逐、故幼童而守一藝、白首而後能言、安其所習、毀所不見、終以自蔽、此學者之大患也」とある。
- (9) 原文には「漢初典籍無紀。劉氏創意總括羣書、分爲七略、只收書、不收圖。藝文之目遞相因習。後之人將慕劉班之不暇、故圖消、而書日盛」とある。ここでは劉歆の「七略」及び「劉班」と並稱される班固の「漢書」藝文志しか挙げられていないが、「七略」のもととなったのは、劉向の「別錄」であり、鄭樵の批判は劉向にも向けられている。
- (10) 原文は「隋家藏書富於古今、然圖譜無所繫。自此以來、蕩然無紀。至今、虞夏商周秦漢上代之書具在、而圖無傳焉。」
- (11) 「素象」の原文は「惟任宏校兵書一類、分爲四種、有書五十三家、有圖四十三卷、載在七略、獨異於他。宋齊之間、羣書失次、王儉於是作七志、以爲之紀。六志收書、一志專收圖譜、謂之圖譜志。不意末學而有此作也。」
- (12) 「原學」の原文は「古之學者爲學有要、置圖於左、置書於右、素象於圖、索理於書。故人亦易爲學、學亦易爲功。」
- (13) 「素象」の原文は「尚辭務說、故人亦難爲學、學亦難爲功。雖平日胸中、有千章萬卷、及寘之行事之間、則茫茫然不知所向。」
- (14) 原文は「何爲三代之前學術如彼、三代之後學術如此。漢微有遺風、魏晉以降日以陵夷。」
- (15) 「辭章之學」については「辭章雖富、如朝霞晚照、徒規耀人耳目」といい、「義理之學」については「義理雖深、如空谷尋聲、靡所底止」とある。
- (16) 原文は「以圖譜之學不傳、則實學盡化爲虛文矣。」
- (17) 原文は「大抵儒生家多不識田野之物、農圃人又不識詩書之旨、二者無由參合、遂使鳥獸草木之學不傳。」
- (18) 原文は「與田夫野老往來、與夜鶴曉猿雜處、不問飛潛動植、皆欲究其情性。」
- (19) 「寄方禮部書」の著述年については吳懷祺校補・編著『鄭樵文集』(書目文獻出版社、一九九二年)の「鄭樵年譜稿」を参照。以下本論の鄭樵に關わる事績の年代はすべてこの年譜による。「獻皇帝書」については同書卷二による。
- (20) 原文は「凡書所言者、人情事理可即已意而求。董遇所謂讀百遍理自見也。乃若天文、地理、車輿、器服、草木、蟲魚、鳥獸之名、不學問、雖讀千廻萬復、亦無由識也。」
- (21) 原文は「自補之外、或恐人不能盡識其狀。故又有畫圖。」
- (22) 「器服略」には「臣舊嘗觀釋奠之儀而見祭器焉。可以觀觀、可以說義、而不可以適用也。其制作蓋本於禮圖。禮圖者初不見形器、但聚先儒之說而爲之。是器也、姑可以說義云耳」とある。
- (23) 原文は「張華、晉人也。漢之宮室千門萬戶、其應如響、時人服其博物。張華固博物矣、此非博物之效也。見漢宮室圖焉。武平一、唐人也。問以魯三桓、鄭七穆、春秋族系、無有遺者、時人服其明春秋。平一固熟於春秋矣、此非明春秋之效也。見春秋世族譜焉。臣舊亦不之知、及見楊侔期洛京圖、方省張華之由、見杜預公子譜、方覺平一之故。由是益知圖譜之學、學術之大者。」
- (24) 鄭樵は「通志」總序において孔子が「詩」「書」「禮」「樂」を兼學し博識であったこと、二帝三王の事績に通じたことを「會通」の淵源とし、これに續いて司馬遷が「詩」「書」「左傳」「國語」「世本」「戰國策」「楚漢春秋」といった諸書や黃帝から秦漢の世にいたるまでの歴史に通じ、まとめたことを會通の模範とした。これに對し、諸子百家の分立を會通が失われた端緒と考え、斷代史である「漢書」を著した班固は會通の義を失ったと批判している。

- (25) 陸游『渭南文集』（四部叢刊）初編）卷三十一「跋石鼓文辨」による。
- (26) 原文は「臣本山林之人、入山之初、結茅之日、其心苦矣、其志遠矣。欲讀古今之書、欲通百家之學、欲討六藝之文而爲羽翼、如此一生則無遺恨。」
- (27) 原文は「今天下圖書、若有若無、在朝在野、臣雖不一見之、而皆知其名數之所在、獨恨無力抄致、默而識之耳。謹搜盡東南遺書、搜盡古今圖譜、又盡上代之鼎彝、與四海之銘碣。遺編缺簡、各有彝倫、大篆梵書、亦爲釐正。」
- (28) 「上宰相書」には「樵生爲天地間一窮民、而無所恨者、以一介之士見盡天下之圖書、識盡先儒之闡奧」や「樵也、願討理圖書以自効、使東南之圖書已盡、今古之圖譜無遺、金石之文、鼎彝之志、莫不陳于前」とある。
- (29) 鄭樵の讀書量については、明の鄭紀『東園文集』（臺灣商務印書館『景印文淵閣四庫全書』第一二四九冊所収）卷八「送十三弟廷秀司教貴池序」が引く朱熹の言葉に「朱晦菴嘗云、莆陽惟有鄭夾漈讀得天下八分書」とある。この言葉は、現存する他書には見えない。
- (30) 畢仲游『西臺集』（上海商務印書館編『叢書集成』初編所収）卷六「召試館職策」による。原文は「自嘉祐以來、天下之士常患乎科舉之累、而尤以詩賦爲無用。故廢去偶儷破碎之辭、而進以通經義理之學、庶幾乎有用。而十數年之間、綴文之士、號爲通經者、偶儷破碎、反甚于詩賦。」
- (31) 王孝魚點校『二程集』（中華書局、一九八一年）卷一「端伯傳師說」による。原文は「治經、實學也。…如中庸一卷書、自至理便推之於事。如國家有九經、及歷代聖人之迹、莫非實學也。」
- (32) 王柏『魯齋集』（景印文淵閣四庫全書）第二八六冊所収）卷四「研幾圖序」には「近世夾漈鄭公遂作圖譜畧、固不足以盡天下之圖、而圖之名義亦可概見。其論縱橫開闔、援引宏博、既富矣哉。而於理非其所尚、此爲可恨焉耳」とある。

